

〈特別寄稿〉

等々力古墳（御嶽山古墳）発掘調査報告補訂

徳川義宣

筆者は先年本誌第九号に本稿と同じく題した報告を揚げた。同古墳を昭和二十五年に発掘して、半世紀近く経過しながらも、未報告となつてゐた慙愧の念から筆を執つた次第であつた。報告書作成を諦めてゐた最大の理由は、本誌第九号七六頁に記した通り、発掘日誌や製図用スケッチ・図面・写真等の発掘に伴ふ一切の記録が、発掘参加者でそれらを保管していた部員前田幸雄の自宅の全焼により灰燼に帰した故であつた。にもかかはらず報告執筆の蛮勇を揮ふと決意したのは、発掘した遺物がほぼ満足に学習院大学史料館に収納されるに至り、それらの精細な調査が行なはれると知つたが故であつた。

だが、報告執筆の手がかりとし得る文字資料は、一日分僅かに数字から十数字しか記していない筆者の卓上日記の発掘三日間分、三葉のみであつた。発掘参加者のうち前田幸雄は既に歿し、江村清・穂積俊泰は事実上はその発掘のみ

の単なる補助作業員であったし、田實英一も大学卒業後は考古学や歴史学とは無縁となつてゐたので、彼等に資料や記録の保管はもとより、証言を期待することも不可能であつた。由て卓上日記三葉と遺物以外は、全て筆者の臚げな記憶によつて執筆した報告であつたことは前稿に記した通りである。

ところが平成十年一月五日付で、筆者と同級で同じく高等科史学部部員であつた岡田茂弘氏から、同氏のトランクルームに保管してあつた諸資料の中より見つかったと附言して、筆者が当時「等々力円墳発掘日誌」と題して執筆した四百字詰原稿用紙五枚と、「Ⅱ図」と題し二十分之一的の縮尺を示して方眼紙にスケッチしたトレンチ内の遺物出土状態の側面図とが送られて来た。東西と南面の二様の立面を描いた方眼紙の裏には2610. 4. 13 (木) M. Hottaの日付と当時堀田姓であつた筆者のサインが記してあるので、その図が発掘最終日の三日目に現地で作製したスケッチであると確認される。トレンチの区分と遺物出土位置を示した平面図も「Ⅰ図」として当然作製したはずだが、遺憾ながら見つかったのは側面図のみである。

その粗雑なスケッチによつても、過年記憶のみによつて記した出土状態には、かなり訂正を加へなければならぬと知られるので、その製図は西村慎太郎氏の勞を煩はせることとし、筆者は発見された日誌を左に掲げて責を補ふこととする。文は文字の用法や句読点に至るまで一切改めず原文のままとする。

等々力円墳⁽¹⁾発掘日誌

昭和廿五年四月十一日、學習院高等科史学部は、東京都世田谷区玉川等々力町一丁目二一八〇番地⁽²⁾所在の円墳を發掘する事となつた。十一日、朝九時半等々力駅集合。参加者江村清・前田幸雄・穂積俊泰・田實英一・堀田正祥、以上五名。駅より南へ徒歩にて約五分⁽³⁾、不動堂の前を左に折れ、現地に到着。

古墳は全体を笹で覆はれ、松・桜・紅葉等の比較的小さいものがまばらに生えてゐた。古墳の西北側は道の為、約三米許り削り取られてゐた。頂上に登り、方面観測し、十時より発掘開始。東南東、西北西に幅一米、長さ二米のトレンチを入れる（実測図参照⁵）。東側より、親指大の葺石が現はれる。ボーリングに依つてこの葺石が東・南・西と半円を画いてゐる事を知り、半円の内部へとトレンチを延ばす。円筒埴輪の破片と共に、縄文土器片、土師、須惠の破片が混り土は黒色。表土は笹の根の為になか／＼作業進行せず。

鉄鍬一個出土し、その周囲からは別段何も出ない。晝の休憩。攪乱された後かも知れぬとも考へられた。円筒埴輪の周囲は全体に一米許りづつは削られた模様であり、ボーリングにて円筒埴輪を探るも見込みなし。下の畠に埴輪の破片の散在するを認める。

午後の作業開始後間もなく、トレンチの東側、表土下約五十センチの點より、甲鎧の一部を発見し、それを追ひ西へトレンチを延ばす。甲鎧の南側に鉾出土。尚も西へ追へば、重なる様にして西側にもう一つ甲鎧が現はれる。破損を虞れ東側の甲鎧を上げる。中から鉄鍬廿餘・小刀一出土。鉾はまだよく木部を残してゐた。西側の甲鎧を西に追つてトレンチを延長、第二区とする。甲鎧の西側より銅器二個（種類不明）出土。その下から木片と共に刀剣が現はれ、先づ甲鎧を上げる。今度は内部には何も無し。南側より玉二個出土。刀剣にとりかゝる。周圍より木炭・木片が現はれ、箱に納められてゐたものである事が判る。鉄鍬・銅帯が出土。刀剣の表土を薄く剝いて行けば一振、木鞘の上に総金箔を施したものが出土⁶。残念乍ら金箔はバラバラと自然に崩れてしまった。刀剣は錆と共に固まり、直ちに何本か判定し得ず。日没時となり、急ぎ遺物を纏め、古墳下の駐在所に預け、第一日の作業を終了とする。刀剣八、と判明。

第二日目、四月十二日、朝十時等々力駅集合。参加者前日と同じ。第二区のトレンチの西側より、葺石発見。

第二区の北側より木棺と思はれる炭化物が、かなり不明瞭に現はれる。第四区のトレンチを入れる。葺石のみにて遺物は発見されず、第三区のトレンチを設定し、木棺確認に全力を注ぐ。二人づつに分れ、一組は現トレンチより北に二米の地點に幅一米、長さ三米のT字型トレンチを入れる。併し、葺石も何も遺物は発見されず。尚も東側に幅一米、長さ二米のトレンチを入れ、ボーリングするも何も遺物は発見し得ず。第三区は、笹の根を除き、表土を除いた所で日没となり、第二日目の作業を終る。前日、駐在所に預けた遺物を取纏め引上げる。

第三日目、四月十三日、朝十時等々力駅集合。参加者、田實英一・堀田正祥、二名。⁽⁹⁾

第三区の木棺と思はれる炭化物を追って掘り下げる。炭化物は東西に約二米七十センチ、南北に約七十センチの矩形を持ち、厚さは矩形の縁に厚く、内部に薄く一概には云へぬが二十〜二十五センチと認められた。炭化物の位置、深さは実測図の通り。甲鎧、刀劍等の出土位置と平行し、又深さも同じであった。炭化物の中からは、竹ペラにて薄く剥がして行くも、何等遺物は発見されなかった。一寸木棺⁽¹⁰⁾としては長さが長い點、遺物の発見されない點等、疑問が残らないでもなかったが、その出土位置からして、又他のトレンチより何等遺物の発見されなかった點からして、この炭化物層を木棺と兩人共確認して、等々力古墳発掘作業を終へ、トレンチの穴を埋め、三日間に亘った発掘を終了した。

尚、古墳附近の人々、我々の作業見物に來た人々から、以前この古墳を畑にした際、銅鏡が出土し、現在某寺に在ると聞き、他日、その寺を訪ねる事とした。
(堀田 記)

右の発掘日誌は発掘時のメモをもとに、発掘終了の数日後に執筆したものである。加除訂正が多いし、随伴して伝へられた「Ⅱ図」と題した出土状態測面図は明らかに現場スケッチで製図ではない点から類推しても、発掘日誌

の下書きであったと思はれる。この発掘日誌と「Ⅱ図」とが、何故岡田茂弘氏の手許に保管（1）されるに至ったのかは全くの謎である。発掘の年、昭和二十五年十一月の例年恒例の輔仁会大会文化祭に展示する準備として、遺物を分類し復原を計りつつ計測した憶えがあるが、それらの遺物実測報告書はもとより、調査記録メモも随伴してゐない。残念ながらそれらの記録や遺物の出土位置を示したトレンチ区分平面図や側面図の製図は、写真と共にやはり前田幸雄の自宅火災で焼亡したと考へられる。

粗雑な測面スケッチと発掘日誌とは、それらが既に製図清書されて脱け殻となつてゐたからこそ、昭和二十五年夏休み前に史学部委員長となつた岡田茂弘氏の手許に保管されたのではないだろうか。発掘記録の断片ではあるが、発掘現場でのスケッチと数日後に執筆したと思はれる発掘日誌とが伝存してゐたことを喜び、保管し再発見してくれた岡田氏に満腔の謝意を表して前稿の補訂とする。

尚、全くの余談であるが、発掘第一日の四月十一日に硬式野球部の対外試合が急に組まれ、野球部員で当時唯一人の捕手だった筆者は、史学部の発掘計画の方が早くから決まつてゐた予定であると申し立てて監督と大喧嘩し、試合出場を拒否して発掘を実施したと憶えてゐる。試合に出場してゐれば、この発掘報告もあり得なかつた。試合は大敗したと聞いた。

註

（一）筆者達は等々力古墳と称してゐたが、世には御嶽山古墳とも称されてゐる。また筆者達は円墳と認識してゐたが、平成四年に世田谷区教育委員会により実施された

周濠部の調査により、全長五二米の帆立貝式前方後円墳と推定されるに至つてゐる。松崎元樹「世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査」〔『学習院大学史料館紀要』第九号

学習院大学史料館、一九九七年三月二十五日発行）以後この紀要を「紀要九号」と略称する。

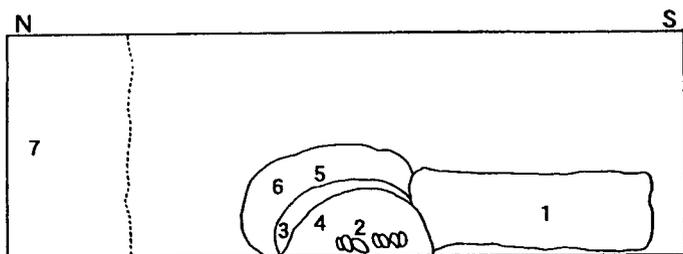
- (2) 前稿では「紀要九号」七〇頁に「二一八番地」と記したが、それは筆者が当時用ゐてゐた「世田谷ヶ区」地図に記入しておいた古墳記号の読み取りによる位置推定であるから、二一八〇番地の方を採るべきであらう。
- (3) 前稿では「約十分」と記した。同距離でも十代と六十代との距離時間感覚の相違が計らずも顕れた様である。
- (4) 前稿では「南北一メートル、東西二メートルのトレンチ区」と記したが、トレンチの角度は四十五度時計回りに修正を要することとなった。
- (5) この実測図は失はれて伝存してゐない。
- (6) 棒状ではなく板状化した炭化物であったための推測である。「箱」が誤認であることは云ふまでもない。
- (7) 「紀要九号」二八頁参照。胡録の吊手金具を銅帯と誤認。
- (8) 記憶では長さ数センチ、幅二センチほどの大きさで、薄い銅板の上に金が覆せられてゐた。それが鍍金であったか漆箔であったかは確認してゐない。銅板であった故に「木鞘」と考へたのであって、柄の部分か或は刀剣以

外の遺物の付属品であったかも知れない。崩れた銅板片を採集してシャーレの中に保管しておいたが、金は短年月のうちに認め難くなったと記憶してゐる。銅鏽により剝落したのであらうか。

(9) 前稿では三日目の発掘参加者は卓上日記に記録していないが、田実、堀田、前田の参加は確実と記した。それも記憶の誤りであった。

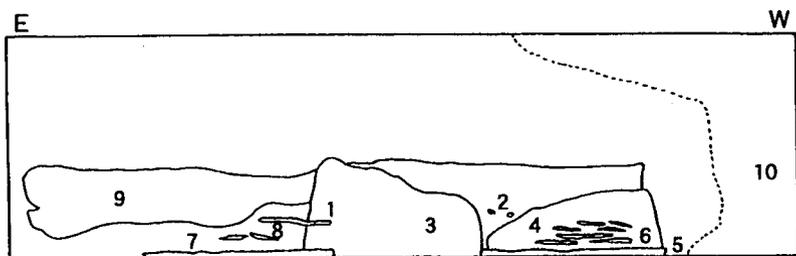
(10) 一寸「ちよっと」と読む。

(11) 岡田茂弘氏からは、かつて同古墳より出土し『考古学雑誌』第三〇巻第四号に笠井新也氏により「武蔵国玉川村古墳出土の七鈴鏡」と題して発表された七鈴鏡の写真もこの発掘日誌と同じく伝存してゐたと記してコピーが同封送付されて来た。写真を貼った台紙には「御嶺山古墳」「萬願寺所」と記されてゐるが、この七鈴鏡は『世田谷区史料第八集―考古編』に満願寺の鈴鏡として掲載された実測図に同じである。某寺、即ち満願寺を後日訪問したが、七鈴鏡の実見は許されなかつた記憶がある。同年、即ち昭和二十五年秋の文化祭での等々力古墳発掘報告展示に併せて報告したいと考へての訪問だったと記憶してゐる。



「II図」東面

1. 木棺 2. 鉄鏃 3. 鉾 4. 甲鏡 5. 甲鏡 6. 玉 7. ふき石



「II図」南面

1. 帯 2. 玉 3. 甲鏡 4. 甲鏡 5. 鉾 6. 鉄鏃 7. 刀剣 8. 銅器 9. 木棺 10. ふき石